

○研究あれこれ

「御根太縁記」をめぐって—十三峠の伝承に思う—

山村 雅 史

中世奈良や京都の河原者は、年末・年始や八朔などに、関係を持つ権門にしばしば草履を献上した。奈良の例では、河原者次郎や七郎が大乗院門跡に金剛草履を献上したことが確認できる。このような権門への草履献上の意味は明らかではないものの、中世奈良では専ら河原者が行っていたことを考えると、予祝や邪気を払うなどの多分に呪術的な行為であったと思われる。そして、江戸時代奈良の被差別部落から、年始・八朔や節句に興福寺に藺草履が献上されたように、中世河原者の草履献上の慣習は近世になっても引き継がれた。

近世大和では、式下郡内の被差別部落のH家が、禁中に御召緒太草履を献上したことがよく知られる。H家に伝わる「御根太縁記」（『奈良県被差別部落史史料集』第2巻所収、1986年発行）は、それについて次のような由緒を記している。

むかし、天皇の姫宮が事情があって平群郡十三峠の麓の草むらに捨てられたという。たまたまH家先祖の佐平治が通りかかり、姫宮の状態を痛ましく思ったので自分の家へ連れて帰ったという。

姫宮は佐平治に、「山谷で朽ち果てようとするところを、命を救ってもらって嬉しい。」などと感謝し、「禁中を出て以来慕ってきた父君母君に、せめて私がここにいることを知らせてほしい。」と頼んだ。頼まれても禁中に伝えるすべを持たない佐平治は、草履を作って禁中に持っていき、その周りで声を出して売り歩くことにした。

こうして佐平治は禁中出入りの人々に近づき、機会を見つけて姫宮をかくまっていると話した。それが天皇の耳に入ると、大変喜び、佐平治の慈悲深い心に感動して末代まで草履を禁中に貢納することを許可した。こういう事情で草履を後々まで献上するようになったというのである。

この由緒に出てくる十三峠は平群町福貴畑と大阪府の境にあるが、そこには十三塚と呼ばれる十三の塚があり、貴人を埋めたなどの伝承がある。築造時期が17世紀以前に遡ることができるこの塚は、築造目的など明らかでないが、さまざまな民俗信仰の対象となっていた。

H家が所持したこの縁起は、中世に淵源を持つ草履献上の呪術的な意味が社会で忘れられていく

なかで、禁中への草履献上の由来を説明するために十三塚伝承などを取り込んで語り伝えられるようになったと考えられるのではないだろうか。

ところで、この由緒で語られる話は、十三峠すぐ近くの平群町のある被差別部落にも伝わっていた。それによると、昔その被差別部落に住む男が十三峠を通ると、俄に出来た十三塚の一つから呻き声が聞こえたという。掘り出すと女性が埋まっていたので、自宅に連れ帰って事情を聞くと、京都の姫宮で、事情があって十二人の侍女とともに十三塚に埋められたと言う。姫宮はそこに住むうちに男と結婚し、やがてその子孫がその被差別部落を形成したという（喜田貞吉「学窓日誌」『民族と歴史』第7巻第1号、大正11（1922）年1月）。

また、別伝では、その平群町の被差別部落に住む男とは、のちH家の祖となったという伊平であったことになっている（緑雲「?（旧部落名）」『明治之光』第2巻第3号、大正2（1913）年3月15日発行）。

地理的なことを考慮すると、この由緒は本来平群町の被差別部落に伝わったものと考えた方がふさわしいが、そうすると、当初は一種の貴種流離譚によって村の形成を説明することを趣意とした伝承であったとも考えられる。その伝承に込められた想いを想像するとき、周りの村から「異なる」との意識を持たれ差別を受けていたその被差別部落の人々が、「異なる」と意識される原因をこのような伝承によって説明しようとしたのではないかと思われてならない。

（史料センター研修員）